# 広島芸術学会活動報告

## 二〇一四年七月一日～二〇一五年六月三十日

**▼平成二十六年七月二十四日**付で「藝術研究2014」（年報第二十七号）を発行した。

**▼平成二十六年七月二十七日（日）**

（公財）ひろしま美術館講堂において平成二十六年度総会、第二十八回大会を開催した。

総会は菅村亨事務局長の開会のことば、青木孝夫会長挨拶の後、末永航氏を議長に選出し議事を進めた。第一号議案「平成二十五年度事業報告並びに決算報告」について、資料にもとづき、事業報告が青木会長、決算報告が菅村事務局長から説明され、続いて竹澤雄三監査から監査報告があり、審議の結果、承認された。第二号議案「平成二十六年度事業計画並びに予算案」について、資料にもとづき、事業計画が青木会長、予算案が菅村事務局長から説明があり、審議の結果、承認された。

次に、第三号議案「次期会長が指名する委員（五名）及び監査（二名）の承認について」の前に、平成二十五年度末に実施された委員選挙の結果と会長・副会長の選任等について、選挙により選出された委員は、青木孝夫、伊藤由紀子、大井健地、桑島秀樹、末永航、菅村亨、関村誠、谷藤史彦、馬場有里子、古谷可由で、これらの委員の互選により、青木孝夫が会長に、末永航が副会長に就任したことが菅村事務局長から報告された。その後、会長の指名する委員五名、袁葉、柿木伸之、西原大輔、船田奇岑、松田弘、さらに監査二名について加藤宇章、竹澤雄三の選出が報告され審議の結果、承認された。議事審議の終了後、青木孝夫会長挨拶があり、閉会した。

大会は三件の研究発表と公開座談会を行った。研究発表は①向井能成（呉市役所産業部海事歴史科学館学芸課市史編さん係）「日本画と洋画のはざまで――知られざる画家三好光志について――」、②村上佑介（広島大学大学院教育学研究科研究生）「サイト・スペシフィック彫刻の可能性と課題――日本のアート・プロジェクトを中心に――」、③西嶋亜美（尾道市立大学）「ドラクロワの著述にみる文学と絵画」。

公開座談会は「芸術におけるメディアとオリジナリティ」をテーマとし、（公財）ひろしま美術館と当学会の共催として実施した。高橋 秀（倉敷芸術科学大学名誉教授）による基調発言に続き、谷藤史彦（ふくやま美術館学芸課長）、伊藤由紀子（インデペンダント・キュレーター、現代美術）が登壇し、司会の古谷可由（ひろしま美術館学芸部長）とともに四名による意見交換、議論が行われた。なお、座談会終了後、開催中の「東広島市立美術館所蔵：版 - 技と美の世界」展を自由観覧とした。総会・大会参加者六十二名。

**▼平成二十六年八月二十七日（水）**

会報第一二九号を発行。巻頭言は馬場有里子（エリザベト音楽大

学准教授）の「色、記憶、戦前」。第二十八回大会の研究発表の報告は、①向井能成の発表を松田弘（インディペンデント・キュレーター）、②村上佑介の発表を菅村亨（広島大学大学院教授）、が執筆し、公開座談会の報告は森静花（公益財団法人ひろしま美術館学芸員）が執筆した。

なお、研究発表③西嶋亜美の発表報告は、都合により次号に掲載した。

また、袁葉のエッセイ「夢の再会まで」を掲載した。

**▼平成二十六年十月四日（土）**

第一〇八回例会として縮景園清風館において、いちえプロジェクト第二回公演　一人芝居「ぼっけえ、きょうてえ」鑑賞会を開催した。午後一時十五分に縮景園正面入り口に集合し、午後二時から三時三十分まで公演を観劇、その後、四時から出演者のお話を伺った。

**▼平成二十六年十一月二十七日（火）～十二月七日（日）**

芸術展示「制作と思考」第一回芸術表現企画「とんがった表現を考える」を開催した。[Site A] 横川創苑会場展は十一月二十七日（火）～十二月二日（火）、[Site B] 広島芸術センター会場展は十一月三十日（日）～十二月七日（木）。詳細は別掲の報告のとおり。

**▼平成二十六年十二月二日（火）**

会報第一三〇号を発行。巻頭言は大橋啓一（ひろしま美術研究所）の「臨床美術は美術のラジオ体操」。第二十八回大会の研究発表③西嶋亜美の発表報告を末永航（広島女学院大学国際教養学部教授）が執筆し、大井健地（広島市立大学名誉教授）の「入野忠芳・ヒロシマを生きた画家―レッカともえたジャガイモのために」（連載第1回）を掲載した。

**▼平成二十六年十二月二十日（土）**

広島ＹＭＣＡ国際文化センター本館４０１会議室において第一〇九回例会を開催した。研究発表は①安部孝典（関西学院大学大学院文学研究科研究員）「ジャン・コクトーとフランソワ・トリュフォーの映画に見る作家性の系譜」、②山下寿水（広島県立美術館学芸員）「建築写真のモダニティー、あるいは新即物主義のリアリズムについて」。例会終了後、懇親会を開いた。

**▼平成二十七年二月二十日（金）**

会報第一三一号を発行。巻頭言は柿木伸之（広島市立大学国際学部准教授）の「芸術の力で死者の魂と応え合う時空間を――被爆70周年の広島における表現者の課題――」。松田弘（前広島県立美術館学芸課長）が執筆した第一〇八回例会報告を掲載し、第一〇九回例会研究発表の報告は①安部孝典の発表を桑原圭裕（関西学院大学文学部助教）、②山下寿水の発表を桑島秀樹（広島大学大学院総合科学研究科准教授）が執筆した。また、大井健地の「入野忠芳・ヒロシマを生きた画家―レッカともえたジャガイモのために」（連載第2回）を掲載した。

**▼平成二十七年三月五日（日）**

広島大学学士会館2階レセプションホールにおいて、第一一〇回例会を開催した。研究発表は①石本理彩（広島大学大学院総合科学研究科博士課程）「ベアトの富士山―オリエンタリズムから読み解く明治日本」、②鄭子路（広島大学大学院総合科学研究科博士課程）「中世歌論における「幽玄」の研究」。

**▼平成二十七年四月二十四日（金）**

会報第一三二号を発行。巻頭言は関村誠（広島市立大学教授）「海外出張での『時間』」。第一一〇回例会の研究発表の報告は①石本理彩の発表を兼内伸之介（広島大学大学院総合科学研究科修士課程）、②鄭子路の発表を三木島彦（広島大学総合科学部非常勤講師）が執筆した。また、大井健地の「入野忠芳・ヒロシマを生きた画家―レッカともえたジャガイモのために」（連載第3回）、袁葉のエッセイ「平山郁夫先生と隣り合って」を掲載した。

**▼平成二十七年五月十七日（日）**

第一一一回例会を開催した。この例会は「高原の美術館と愛媛のニューウェーヴ探訪」と題して、学芸員、地元の加賀のご案内で、久万高原町立久万美術館、砥部焼工藤省治「春秋窯」、伊丹十三記念館、エヒメイズムを専用タクシーで見学した。午前十一時に松山観光港に集合し、昼食の後、予定地をめぐり、午後六時頃解散した。

**▼平成二十七年六月二十八日（日）**

会報第一三三号を発行。平成二十七年度総会・第二十九回大会のスケジュール、研究発表要旨、シンポジウム、関連行事「キッズゲルニカ・ワークショップ」などの案内を掲載した。また、河本真理の〈「広島・長崎被爆70周年　戦争と平和展」開催に寄せて〉、大井健地の「入野忠芳・ヒロシマを生きた画家―レッカともえたジャガイモのために」（連載第4回、最終回）、西原大輔の第一一一回例会報告を掲載した。

※文中、敬称を略させていただきました。また、肩書きは当時のものです。

**◆会員状況**

平成二十七年六月三十日現在、法人会員二法人、個人会員二〇一名（一般会員一五三名、学生会員四十八名）

事務局長　菅村　亨